

JACET-Kanto Newsletter

一般社団法人大学英語教育学会関東支部

October 8, 2014 No.3

JACET 関東支部ニューズレター第 3 号 (WEB 版) 刊行に寄せて

支部長 木村松雄 (青山学院大学)

JACET 関東支部ニューズレター (WEB 版) 第 3 号をお届けいたします。関東支部ニューズレター委員会委員長の高木亜希子先生 (青山学院大学) と副委員長の下山幸成先生 (東洋学園大学) を初めとする多くの先生方の不断のご尽力に衷心より御礼申し上げます。

2013 年度より学術研究発表は「関東支部紀要」(*JACET-KANTO Journal*) に掲載し、それ以外の活動報告は「ニューズレター (WEB 版)」(年 2 回) に掲載致しております。今回は 2014 年度の第 1 回目 (通算第 3 回目) のニューズレターとなります。

2014 年度関東支部大会 (第 8 回) は去る 6 月 29 日 (日) に、青山学院大学青山キャンパス (17 号館) にて開催致しました。大会テーマを喫緊の課題である「大学の国際化とグローバル人材育成」(Globalization in Higher Education and Human Resource Development) と致しましたと

ころ、300 名を超える参加者を得ることができました。基調講演は明石康先生 (公益財団法人国際文化会館理事長・元国連事務次長) に御願い致しました。明石先生は、1. 進行する国際競争と危うい日本の地位、2. 過去との対面と説明責任、3. グローバル人材とは、4. グローバル化世界に必要なものとは等の観点からこれからの大学の国際化とグローバル人材育成の在るべき姿について講演されました。グローバル人材に必要な要素として、(1) コミュニケーション能力、(2) やる気、チャレンジ精神、(3) 異文化の理解を挙げられましたが、3 者間の priority は、(2)、(3)、(1) の順番であることを強調された点が特に印象に残りました。また最後に、永年国連で活躍されたご経験から、グローバル化世界においては、1. 自分の考えをもつ大切さ、2. 共感する能力と懇切に説明する根気、3. 文化の相対性 (Culture Relativism) を信じ、同時に日本文化のアイデン

目次

・ 巻頭言 支部長 木村松雄.....	- 1 -
・ 支部大会報告 支部大会運営委員長 山口高領	- 2 -
・ 第 1 回支部総会報告 支部事務局幹事 高木亜希子.....	- 2 -
・ 月例研究会報告 月例研究会委員 河内山晶子・中山夏恵.....	- 4 -

・ 青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会報告 支部事務局幹事 高木亜希子 月例研究会委員 河内山晶子	- 6 -
・ 支部紀要編集委員会からのお知らせ 支部紀要編集委員長 伊東弥香.....	- 7 -
・ 事務局だより 支部事務局幹事 高木亜希子.....	- 8 -

ティティの堅持等が重要であることを強調されました。

本大会を締めくくる全体シンポジウムでは、大谷泰照先生（大阪大学名誉教授・JACET 顧問）、本名信行先生（青山学院大学名誉教授）、佐藤邦明先生（文部科学省高等教育局国際企画専門官）のお三方が、主に言語教育政策の観点から活発な議論を展開されました。実践報告 11 件、研究発表 13 件、賛助会員発表 3 件、関東支部企画ワークショップ 2 件、出展参加賛助会員 15 社による支部大会は成功裏に終了することができました。改めて大会開催に当たってご尽力頂いた大会運営委員長長の山口高領先生（早稲田大学）と大会運営委員会副委員長の新井巧磨先生（早稲田大学）と鈴木彩子先生（玉川大学）、さらに大会実行委員長の高木亜希子先生（青山学院大学）と発表審査委員長長の伊東弥香先生（東海大学）を初めとする多くの先生方と会場校である青山学院の事務職員と学生諸君のご尽力に衷心より御礼申し上げます。

月例研究会（年 3 回）（委員長：藤尾美佐先生；東洋大学）と青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（年 5 回）も順調に回を重ねております。4 月より、佐野富士子先生（横浜国立大学）にもう 1 名枠の副支部長職に就いて頂き、笹島茂先生（埼玉医科大学）と共に関東支部の運営の一翼を担って頂くことになりました。

JACET 関東支部は、学会として社会・教育界の負託に応えられるよう、会員の皆様の声を聴きながらさらに前進して行く所存です。何卒さらなるご支援とご協力を賜りますよう衷心より御願ひ申し上げます。

支部大会報告

支部大会運営委員長

山口高領（早稲田大学）

2014 年 6 月 29 日に無事、第 8 回 JACET 関東支部大会が行われました。研究発表のキャンセルが 1 件あり、最終確定版のプログラムは、[こちら](#)です。

昨年度、支部会員の皆さまから頂いたアンケート結果からの「研究活動に役立つ企画をしてほしい」といったご意見を反映し、今年度は関東支部特別企画ワークショップを 2 件行いました。1 つは中谷安男先生（法政大学）の「アカデミックライティングへのアプローチ国際ジャーナルへ採択される方法」、もう 1 つは武田礼子先生（青山学院大学）の「TESL/TEFL における会話分析：事例紹介とワークショップ」です。

来年度も、7 月に青山学院大学で支部大会開催が予定されています。関東支部大会という名称ではありませんが、他の支部の方も発表応募申し込みも含めて、参加が可能です。

次回の支部大会運営委員長は、新井巧磨先生（今回副委員長・早稲田大学）になっていただき、私は支部大会の後方支援をするつもりです。今後とも、どうぞよろしくお願い申し上げます。

第 1 回支部総会報告

支部事務局幹事

高木亜希子（青山学院大学）

2014 年 6 月 29 日（日）に、青山学院大学 17 号館本多記念国際会議場に於いて、2014 年度第 1 回支部総会が開催されました。支部総会では、2013 年度事業報告・会計報告、2014 年度事業計画、社員選挙についての説明が行われました。以下に内容を記載いたします。なお、会計報告は省略します。

■2014 年度事業計画■

I. 大会、セミナー等の開催（1 号事業）

(1) 支部大会の開催

名称：2014 年度関東支部大会

日時：平成 26 (2014) 年 6 月 29 日 (日)

場所：青山学院大学

規模：約 300 名

(2) 支部講演会の開催

名称：青山学院英語教育センター・JACET 関東支部共催英語教育講演会

日時：平成 26 (2014) 年 4 月、9 月、10 月、12 月、平成 27 (2015) 年 1 月の 5 回を予定

場所：青山学院大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表する講演会を定期的実施する。
- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約 60 名

(3) 支部月例研究会の開催

名称：関東支部月例研究会

日時：平成 26 (2014) 年 5 月、7 月、11 月の 3 回を予定

場所：青山学院大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表する講演会を定期的実施する。
- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約 40 名

II. 『紀要』『支部ニューズレター』等の出版物の刊行 (2 号事業)

(1) 『JACET 関東支部紀要』第 2 号 (英語名：*JACET-KANTO Journal*)

日時：平成 27 (2015) 年 3 月 31 日

規模：約 1150 冊

(2) 「JACET 関東支部ニューズレター」第 3・4 号

日時：①平成 26 (2014) 年 9 月 30 日

②平成 27 (2015) 年 3 月 31 日

目的：支部活動の動向や支部会員への英語教育に関する情報提供と情報交換を行う。

※JACET 関東支部 HP に pdf で掲載

III. その他 (5 号事業)

(1) 支部総会の開催

名称：2014 年度第 1 回、第 2 回関東支部総会

日時：①平成 26 (2014) 年 6 月 29 日

②平成 26 (2014) 年 11 月 8 日

場所：青山学院大学

目的：①2013 年度の関東支部の活動、会計報告、および 2014 年度の関東支部の活動計画、予算案および人事案を示す。社員選挙についての説明を行う。

②2015 年度の関東支部の活動計画、予算案および人事案の審議・承認を行う。

(2) 支部役員会の開催

名称：関東支部運営会議

日時：平成 26 (2014) 年 4 月、5 月、7 月、9 月、10 月、11 月、12 月、平成 27 (2015) 年 1 月、3 月

場所：青山学院大学

目的：支部の運営における審議、計画の立案を行う。

■社員選挙■

社員選挙について

- ・一般社団法人化に伴い、『定款』で社員選挙を行うことが定められている。(現在、135 名)
- ・『定款』に基づき、一般会員約 30 人に一人の割合で、初めての社員選挙を実施。(関東支部は約 1100 名で、36 名前後)
- ・社員の任期：2015 年 4 月 1 日から 2017 年 3 月 31 日の 2 年間

社員の位置付けと選挙の根拠

- ・社員とは年に1度、社員総会に出席し、JACETの運営に関わる幾つかの重要事項を決議することが『定款』にうたわれている。
- ・社員総会や社員選挙の根拠となる『定款』および『社員選挙規程』はJACETのウェブサイトと『会員名簿』の巻末に掲載。

「社員規定」(社員とは)(本部規定より引用)

第6条 この法人に次の会員を置く。

一 一般会員 この法人の目的に賛同して、次条の規定により入会した大学英語教員及びその他の個人。

二 団体会員 この法人の目的に賛同して、次条の規定により入会した大学、研究所、図書館、その他の研究・教育団体。

三 賛助会員 この法人の目的に賛同して事業を援助するために、次条の規定により入会した企業。

四 名誉会員 この法人の活動に特別に寄与し、理事会で承認された個人。

2 この法人の「一般社団法人および一般財団法人に関する法律」(以下、「法人法」という)上の社員の定数は、支部会員数に比例し、概ね一般会員30人の中から1人の割合をもって選出する。なお、会員数の基準日は理事会において定める。

3 社員は一般会員による社員選挙で選出する。社員選挙を行うために必要な規程は理事会において定める。

社員候補者の選考基準

(社員候補者選考基準)

第12条 次の要件を社員候補者選考基準とする。

(1)本学会の事業や活動に深い関心と理解を持ち、学会運営に関して次の視点から有意義な提言やチェック等を行うことが可能であること。

- ①会員としての視点
- ②英語教育の専門家としての視点

③社会貢献からの視点

④経営的視点

(2)本学会社員に相応しい見識や公正な判断力を有していること。

(3)総会への出席等、社員として積極的かつ十分な活動が可能なこと。

社員選挙の方法

・まず、自薦と他薦により候補者を募る。自薦は、4年以上会員である会員が社員立候補の資格(被選挙権)があり、公示後、立候補。また他薦は、一人の会員が被選挙権のある、同じ支部の会員を3名まで推薦できる。

・その結果出来上がった「候補者リスト」を公表し、約1か月間、異議申し立ての期間を設ける。異議申し立て件数が規定以下の場合、その候補者は社員として選出される。

社員選挙の要領とスケジュール

・選挙の具体的な日程や要領は、『社員選挙規程』にのっとり、選挙管理委員会で決定。

・本部総務委員会案では、広島での国際大会の前日に選挙管理委員会が発足。10月に選挙公示。

・選挙管理委員は本部から正副代表幹事3名と各支部の幹事の先生1名、合計10名で構成。

月例研究会報告

月例研究会委員

河内山晶子(明星大学)・

中山夏恵(共愛学園前橋国際大学)

■月例研究会5月報告■

日時:2014年5月10日(土)16:00-17:20

場所:青山学院大学総研ビル(14号館)11階 第19会議室

題目:「言語能力とコミュニケーション能力の落差:コミュニケーションを成功に導く能力とは?」

発表者：藤尾美佐（東洋大学）

報告者：河内山晶子（明星大学）

テストスコア等で示される言語能力が、そのまま、実際のコミュニケーションでのパフォーマンスの高さを保証するものではない。現に、限られた言語能力でもコミュニケーションを上手くとれる学習者もいれば、高い言語能力でもコミュニケーション能力の低い学習者もいる。本講演は、この点に着目し、「コミュニケーションを成功に導く能力とは何なのか？」というテーマを掲げて、Fujio (2011) (昨年度 JACET 新人賞) を基に展開された。英国に 1 年間留学した大学院生 3 名の、英語コミュニケーション能力の変化が、発話交替、流暢性、方略使用の 3 点から分析された。これら 3 点がそれぞれに着眼点としたのは、「発話交替の仕方が母語話者・非母語話者間の関係に与える影響」、「流暢性の変化と流暢性を阻む学習者要因」、「方略使用とコミュニケーション成否との関係」である。分析の結果として、3 名のうち、最も TOEIC スコアの高い (965 点) 参加者 A が、正確性に拘るあまり、発話速度が最後まで低レベルに留まっていたという例がディスコースで具体的に示された。また、同じく参加者 A が、積極的な発話交替ができず、相手が話している内容を自分の発話に活かすこともできないため、双方向的な会話にならないまま、対話者間に「母語話者と非母語話者」の関係が固着してしまっていたという例も示された。これにより、発話交替の少なさが対話者間の関係固着の一因であること、流暢性を阻む一要因が正確性への拘りであること、相手の発話を活かすという方略がコミュニケーション成功の一要因であることの可能性が指摘された。

聴衆からは、L2 での方略的能力の指導は可能なのかという質問や、その指導法に関する質問が寄せられた。これを受けて、教室内での具体的な例が挙げられた。のみならず、教室外での指導に

おいても、対話の対象を英語母語話者に限らず、背景知識を共にするアジア諸国にも目を向け、「非英語母語話者同士のコミュニケーション」の機会を広げることが提案され、これにより L2 方略能力指導の可能性がさらに広がった。司会担当者として、会場の活気を肌で実感した講演であった。

■月例研究会 7 月報告■

日時：2014 年 7 月 12 日（土）16:00-17:20

場所：青山学院大学総研ビル（14 号館）11 階 第 19 会議室

題目：「グローバルな英語コミュニケーション能力の到達基準を求めて—CEFR 準拠の JS 「ジャパン・スタンダード」の策定と実践—」

発表者：川成美香（明海大学）

報告者：中山夏恵（共愛学園前橋国際大学）

CEFR (Common European Framework of Reference for Languages) とは、欧州評議会により開発された外国語の学習、教授、評価のための共通参照枠である。CEFR では、学習者の外国語運用能力の熟達度を 6 レベルに分類し、典型的な学習者ができることを Can-do 記述文の形態で示している。本研究会では、日本においても昨今、注目を集めている CEFR に準拠して策定された「ジャパン・スタンダード」(JS: Japan Standards for Foreign Language Proficiency – based on CEFR) について、その開発・検証・及び現場での実践に関しての報告がなされた。

この JS は、世界基準である CEFR との整合性を保ちつつ、日本の社会文化的コンテキストに適合させた、外国語コミュニケーション能力（特に英語）の到達基準策定の試みである。とりわけ日本の初等中等教育レベルの英語学習者に対応するよう、JS の熟達度レベルは 12 に細分化され、Can-do 記述文も統一化・階層化する工夫が施されて充実している。さらに教育現場での利用に貢

献できるよう、言語材料もレベルごとの典型的な語彙や文法を例示するなどして、JS の言語能力一覧表の全体像は非常に精緻な構造となっている。

Can-do 記述文の概要説明に続いて、教育現場での JS 活用実践例についての報告がなされた。例えば、JS の基準は、(1)年間指導計画の作成、(2)教材の作成・選定、(3)授業、(4)テストの作成と評価、という 4 つのフェーズにおいて活用できるとのことである。実際に、JS をこの 4 フェーズで現場実践してみた結果、学習目標の提示が生徒の学習動機を高めるだけでなく、教員同士が指導目標を共有することが可能になること等の利点が挙げられた。Can-do リストの導入により、指導目標の共有化が確実に進めば、その目標達成のための「教員間の指導法の違いや独自性はむしろ尊重できる」ようになったとの指摘もあり印象的であった。

Q&A セッションでは、「Can-do リスト」の解釈や、実際の活用についてなどの質問がなされ、参加者のこのテーマに対する関心の高さがうかがえる熱気あふれる研究会となった。

青山学院英語教育研究センター・JACET

関東支部共催講演会報告

支部事務局幹事

高木亜希子（青山学院大学）・

月例研究会委員

河内山晶子（明星大学）

■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（第 1 回）報告■

日時：2014 年 4 月 12 日（土）16:00-17:30

場所：青山学院大学総研ビル 11 階第 19 会議室

題目：「CLIL が切り拓く日本の英語教育」

講演者：池田真（上智大学）

報告者：高木亜希子（青山学院大学）

近年ヨーロッパでは、Content and Language Integrated Learning (CLIL) が普及しており、日本でも関心が高まっている。本講演では、CLIL の理念、原理を押さえた上で、どのように CLIL を日本の英語教育に取り入れるべきか、実例や研究例に基づき報告された。

CLIL は様々な教育原理・技法を有機的に統合することで、質の高い授業を目指すものである。理論上の位置づけでは、strong バージョンの Communicative Language Teaching (CLT) 及び Task-based Instruction (TBI) と Immersion の間に位置する。CLIL では、Communication (言語)、Content (内容)、Cognition (思考)、Community (協学) の 4 つの C を重視し、指導を行う。

CLIL の指導には、10 の指導原理があり、内容学習と語学学習の比重は 1:1 であること、様々なレベルの思考力を活用すること、協同学習を重視すること、異文化理解や国際問題の要素を取り入れることなどが含まれる。

一例として、小学生向けの 2 種類の教材が提示され、参加者同士で比較を行った。一つの教材は食べたいものについて応答する文型練習を行うもので、退屈に感じられた。一方、もう一つの教材は食べ物か動物性か植物性か考えたり、どの国から輸入されるか考えたりするもので、思考を促し、内容と言語が統合される教材であった。

他に、高校の実践例として、災害やエネルギーに関するオーセンティックな教材を用いた 4 技能統合型の指導例が紹介された。ライティング力の伸びを測定したところ、流暢さと複雑さは上昇したが、正確さは低下したという興味深い結果が報告された。

現在、日本において、CLIL の実践例はまだ少なく、日本の教育環境に適した教材開発や指導のあり方について、今後、実践と研究を積み重ねていく必要があるだろう。しかしながら、豊かな内容で学習者の動機づけを高めるとともに深い思

考を促し、4技能を有機的に統合できる CLIL は大変魅力的な指導法であり、日本の英語教育を改善していく方法として、大きな可能性があると感じられた。

■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（第2回）報告■

日時：2014年9月20日（土）16:00-17:30

場所：青山学院大学総研ビル11階 第19会議室

題目：「SLA 研究最前線：英語教師に必要な第2言語習得論」

講演者：佐野富士子（横浜国立大学）

報告者：河内山晶子（明星大学）

言語教育者は教育効果を最大限にするために、「何をどう教えるか」を知るだけではなく、「学習者は第二言語をどう学んでいくのか」をも知らなければならない。本講演の前半では、通常一年かかるという英語教師に必要な第二言語習得論の概説を、簡潔にわかりやすく述べていただいた。主な項目は、第二言語習得の定義、様々な研究のアプローチと枠組み、特に教室における第二言語習得研究、学習成果の個人差をもたらす要因、主な仮説、研究手法等であった。

後半は講演の核心的な部分で、「なぜ英語教育に第二言語習得論が必要か」の理由が述べられた。医者等の専門家が専門知識を必要とするのと同じく、言語教師が学習者の言語習得を促進するためには言語習得論が当然必要である（Long, 1990）ことがまず述べられた。しかし第二言語習得論は教師が教育実践後の振り返りの際にも必要な知識である（Ellis, 2014）ことも見逃してはならず、よって授業改善を行う際の判断の拠り所としても重要である（佐野）点も強調された。このように、第二言語習得論を「英語教育」との関連においてのみならず、「教師教育」までも視野に入れて、その必要性を認識させてくれた点は特筆に値する。

講演を通して貫かれていたメッセージは、「教師が目指すべきことは、理論を理解するだけではなく、それを使って教室でどのように学習者の言語習得を進めるかである」というものであった。その姿勢は、例示された講演者の実践にも顕著に見て取れた。数々の工夫の結果到達したという多くの方法のうち、いくつかはワークショップ形式で参加者も体験できた。ひとつは、dictogloss の応用である。これは意識的に英文を書くことを可能にするもので、事前タスクの工夫次第で効果に差が見られることが示された。また writing でのフィードバックも、いくつかの方法を比較した結果、真っ赤になるほど添削するよりも、間違っている箇所を指摘するに止め、自分で考えさせる方が大学生には効果的であることも明らかにされた。重要なのはむしろ内容に関するコメントやアドバイスであること、その中で元気づけたり、ほめたり、内容や文章構成にも手厚い指導をした学習者は、15週間後には飛躍的なライティング力の進歩を遂げたことが報告された。

時間的制約のため講演内での質問者は一名に限られたが、終了後も質問者が列を作り、活発なやりとりが続けられた。「もっと勉強して、もっと工夫した実践をしてみよう」という気にさせてくれた、極めて有意義な講演であった。

支部紀要編集委員会からのお知らせ

支部紀要編集委員長

伊東弥香（東海大学）

関東支部では2013年度より「関東支部紀要（*JACET-KANTO Journal*）」を発行しております。それに伴い、支部会員の研究活動を奨励し、研究の質向上に寄与することを目的として、それぞれの専門分野でご活躍の会員の先生方に論文審査をお願いするべく査読者登録システムを開始しました。年1回を目途に、査読システムの登録者情報を更新することにより、投稿論文にふさ

わしい専門家に査読依頼を行っております。2014年度は第2号を発行すべく、6月に登録者83名に更新をお願いし、また新たな登録者にも加わっていただきました。第1号は、7月20日に応募原稿を締切り、現在は査読者による第1次審査など、発行準備を進めています(2015年3月発行予定)。

事務局だより

支部事務局幹事

高木亜希子(青山学院大学)

■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会及び月例研究会開催のお知らせ■

下記のとおり、共催講演会及び月例研究会を実施いたします。多くの皆さまの参加をお待ちしております。詳細は支部HP、支部会員MLでお知らせいたします。

(1)2014年度第3回共催講演会

日時：2014年10月11日(土) 16:00-17:30

場所：早稲田大学14号館801教室

題目：「CALL 研究最前線：クラウド環境の中で学ぶ反転授業とブレンド型の英語教育
—Dominus illuminatio mea—」

発表者：小張敬之(青山学院大学)

(2)2014年度月例研究会(11月)

日時：2014年11月8日(土) 16:00-17:20

場所：早稲田大学14号館801教室

研究発表：「日本人英語学習者が目指すべきスピーキング能力とは何か：発音・流暢さ・語彙・文法の観点から」

発表者：斎藤一弥(早稲田大学)

(3)2014年度第4回共催講演会(12月)

日時：2014年12月13日(土) 16:00-17:30

場所：青山学院大学総研ビル(14号館)11階第19会議室

題目：「第二言語習得研究からみた英語指導：インプット、インタラクション、アウトプット、フィードバックの観点から」(仮題)

発表者：酒井英樹(信州大学)

■住所変更届提出のお願い■

支部会員の皆様に、支部大会のご案内や支部紀要を確実にお届けするために、転居の際には、[JACET 本部事務局](#)へ住所変更届けを提出していただきますよう、どうぞよろしくお願いたします。

JACET-Kanto Newsletter 第3号

発行日：2014年10月8日

発行者：JACET 関東支部 (支部長 木村松雄)

編集者：高木亜希子、下山幸成、斎藤早苗、川口恵子

発行所：〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25
青山学院大学文学部英米文学科
木村 松雄 研究室内